

## 「サウロの回心」

2016年04月26日

使徒言行録9章1節～9節。さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

サウロ（後のパウロ）はナザレのイエスをキリスト（救い主）と信じるエルサレム教会の信徒たちを許せなかった。ステファノが最高法院でエルサレム神殿に神はおられない、イエスを殺したことは神に逆らうことだと言ったからである。またサウロにとって、神はあくまで栄光の神であって、十字架で殺された犯罪者をキリストと信じる信仰などあり得ないと考えたに違いない。彼は大祭司から迫害の許可書をもらい、信徒たちを殺そうと、男女の別なく縛り上げ、エルサレムに連行した。北に避難した信徒たちを捕えるためにダマスコに追った。その時突然、天から光が照らし、サウロは地面に倒れ伏した。そして「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声があった。「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」という答えが聞こえた。同行していた人たちは、声は聞こえても、誰の姿も見えないので、恐れて立ちすくんだ。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べることも飲むこともできなかった。これがサウロを180度、回心させた復活の主イエスとの出会いである。

使徒言行録はサウロの回心を三度記している。二度目は民衆に、三度目はアグリッパ王にパウロ自らが語ったと書かれているが、これらは皆、使徒言行録の著者の記述である。パウロがしばしば語ったと思われる回心についての説教を著者は心に留め、三度も書いたのである。ところが、パウロは自分で書いた手紙には一度も回心について触れていない。

ガラテヤ書1章12節で「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです」と述べている。またコリント書（二）12章2節～4節で「その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。…彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです」と、第三者的に語っているが、パウロの特異な宗教体験を述べている。これらの言葉が復活の主イエスとの出会いを指しているとも考えられる。いずれにしても、迫害する者を赦し、福音宣教者として用いてくださる、この回心の出来事はサウロ自身だけでなく、キリスト教にとって決定的であった。サウロの回心がキリスト教を世界へと広げる大転換をもたらした。神は生きて働き、サウロを回心させ、今日まで救済史を導いておられる。